

オウム真理教元信徒の手記

広瀬健一

この手記は、女子大学における講義のために、講師が広瀬健一さんに求めたものです。その目的は「カルトへの入会防止」ですが、若者などが直面する「生きる意味」の問題、またオウム事件の動機になった教義とそれを受容した信徒の心理も記されています。

学生の皆さまへ

「生きる意味は何か」―皆さまは、この問いが心に浮かんだことはありませんか。

この質問から私が始めた理由は、それが皆さまの年ごろの人たちが抱きがちな問題であり、また、若者が「カルト」に係わる契機ともなるからです。

オウム真理教による事件以降も、「カルト」に対する警戒の呼びかけにもかかわらず、その被害が跡を絶たないようです。そのために、「カルト」に関する講座が貴校に開設されたのでしょうか。そして、講師の方から、「カルト」への入会を防止するための手紙」を皆さま宛に書くようお話がありましたので、引き受けさせていただきました。それが私の責務と思われたからです。

私は地下鉄サリン事件の実行犯として、被害関係者の皆さまを筆舌に尽くし難い惨苦にあわせてしまいました。そのことは心から申し訳なく思い、謝罪の言葉も見つかりません。また、社会の皆さまにも多大なご迷惑をおかけ致しました。その贖罪は、私がいかなる刑に服そうとかなわないと存じております。せめて、このような悲惨な事件の再発を防止するための一助になることを願い、私の経験を述べさせていただきます。たく思います。

カルトに係わる契機

前述のように、「カルトへの入会を防止するための手紙」を依頼されたのですが、いわゆるカルトのメンバーとしては、私はオウム真理教の信徒の経験しかありませんので、主にオウム真理教（以下、オウムまたは教団）の話になります。

カルトは多様なことがらを提示して入会の勧誘をするそうです。オウムもその唯一の目的である解脱・悟りだけでなく、ヨガによる健康法や能力開発の方向からも勧誘するよう私どもに指示していました。そのため、信徒の入信理由は様々でした。

しかし、信徒の入信理由の特徴は、たとえば「生きる意味」に対する問いのような、解決が極めて困難な問題に関係があったことではないでしょうか。ただし、この「生きる意味」は、仕事に対する生きがいなどの日常的なことではありません。たとえば、「生まれてきた目的」に係わるような、形而上的ともいえることです。それゆえ、この問題はこの世における解決が困難です。仕事に対して生きがいを感じられないならば、適当な仕事を探せばよいのですが、「生まれてきた目的」などはその存在自体問題になることでしょう。

ところが、オウムは「超越的世界観」を有し、この類の問題を解決する機能がありました。これは、日常を超えたオウムの世界観においては、「生きる意味」や「生まれてきた目的」の解答が与えられており、信徒がその世界観を受容すると問題が解決するということです。他方、この世界観は非現実的であるために、それを受容した信徒は一般社会における生活に適応しにくくなり、家族や学校、会社から離れて出家していききました。さらに、教団で集団生活をしているうちに、規範意識まで非現実的な教義に沿うものになり、ついに違法行為をするまでに至りました。

このように、「生きる意味」に対する問いはカルトに係わる契機にもなるので、その心理状態への適切な対処を考える必要があると思います。そのために、まず、その具体例をお話します。

私自身は、高校三年生のとき、「生きる意味」の問題を明確に意識するようになりました。そのきっかけは、家電商店で値引処分された商品を見たことでした。商品価値がたちまち失われる光景を見て、むなしさを感じたのです。ところが、それ以来、私はこの「むなしさの感情」を通して世界を見るようになってしまったのです。事あるごとに、物事の価値が気にかかりました。結局は、宇宙論のいうように、すべては無に帰してしまうだけではないのか……との思いが浮かぶこともありました。そして、私は「生きる意味」―絶対的な価値―に関心を持つようになったのです。そのときは、それまでは大仰に思えた、「朝に道を聞けば夕べに死すとも可なり」と述べた孔子の気持ちが変わるような気がしました。

このような心情に関しては、文献を調べますと、古今東西、類似の経験をした人が多数存在するようです。

スピノザは著書『知性改善論』の冒頭で次のように述べています。

一般生活において通常見られるものすべてが空虚で無価値であることを経験によつて教えられ、また私にとつて恐れの原因であり対象であつたものすべてが、それ自体では善でも悪でもなく、ただ心がそれによつて動かされた限りにおいてのみ善あるいは悪を含むことを知つた時、私はついに決心した、我々のあずかり得る真の善で、他のすべてを捨ててただそれによつてのみ心が動かされるような或るものが存在しないかどうか、いやむしろ、一たびそれを発見し獲得した上は、不断最高の喜びを永遠に享受できるような或るものが存在しないかどうかを探究してみようと。(スピノザ『知性改善論』畠中尚志訳 岩波文庫)

トルストイもその一人です。当時五十歳だつた彼は、外面的には申し分なく幸福な状況でしたが、価値観の崩壊から「生きる意味」の模索を始めています。そのときの心情を、彼は著書『懺悔』に記しています。

何やらひどく、奇妙な状態が、時おり私の内部に起こるようになって来た。いかに生くべきか、何をなすべきか、まるで見当がつかないような懐疑の瞬間、生活の運行が停止してしまうような瞬間が、私の上にやつて来るようになったのである。そこで私は度を失い、憂苦の底に沈むのであつた。が、こうした状態はまもなくすぎさり、私はふたたび従前のような生活を続けていた。と、やがて、こういう懐疑の瞬間が、層一層頻繁に、いつも同一の形をとつて、反復されるようになって来た。生活の運行が停止してしまつたようなこの状態においては、いつも「何のために？」で、それから先は？という同一の疑問が湧き起こるのであつた。(略)

この時分に最も多く私の心をとらえていた農事に関する考察の間に、突然、つぎのような疑問が起こつて来るのだつた。「よろしい、お前はサマールラ県に六千デシャチーナの土地と、二百頭の馬を持っている。が、それでどうしたというんだ？……」そして私はしどろもどろになつてしまつて、それから先き何を考えてよいのか、わからなくなるのだ。またある時は、子供達を自分はどういう工合に教育しているかということを考えているうちに、「何のために？」こう自分に言うのであつた。それからさらに、どんなにしたら民衆に幸福を獲得させることができるだろうということ考察しているうちに、「だが俺にそれが何のかかわりがある？」突然こう自問せざるを得なくなつた。また、私の著作が私にもたらす名声について考える時には、こう自分に向かつて反問せざるを得なくなつた。「よろしい、お前は、ゴゴリヤ、プーシキンや、シェークスピアや、モリエールや、その他、世界中のあらゆる作家よりも素晴らしい名声を得るかもしれない。―が、それがどうしたというんだ？……」これに対して私は何一つ答えることができなかった。この疑問は悠々と答えを待つてなどない。すぐに解答しなければならぬ。答えがなければ、生きて行くことができないのだ。しかも答えはないのだつた。

自分の立っている地盤が滅茶々々になつたような気持がした。そして立つべき何物もないような気持がした。今まで生きて来た生活の根柢が、もはやなくなつ

てしまったような気持がした。今や自分には、生きていくべき何物もないような気持がした。(トルストイ『懺悔』原久一郎訳 岩波文庫)

以上の記述は、当時の私の心情と共通する点が多々あり、この種の心理状態の特徴をよく表現していると思います。特に、「自分の立っている地盤が滅茶々々になったような気持がした。そして、立つべき何物もないような気持がした。」という表現には共感を覚えます。それゆえに、絶対的な価値を求める心理になるのではないのでしょうか。

その後、私は哲学書や宗教書を涉猟したり、宗教の実践者の話を聞いたりしました。高校三年生ですと、大学受験の時期ですが、私は大学の附属高校に通っており、いわゆるエスカレーター式に学部に進学する予定でしたから、時間はふんだんに使えたのです。

哲学については、話は論理的に進行しているのですが、その根本の部分―数学でいえば公理―は哲学者個人の感性によって「真理」とみなしているように思えたので、私にはなじみませんでした。宗教についても、私に反射的に生じる反応は、「真偽をどのように確かめるのか」という抵抗でした。教義の核心が非現実的に思われ、根拠なしにはそれを受容できませんでした。

こうして、私の「生きる意味」の探究は行き詰まってしまったのです。そもそも、絶対的な価値を求めることが、ないものねだりであることは半ばわかっていました。しかし、宗教界をはじめとして、それを体得したという人が存在する限りは、自分で確かめざるを得ない心境だったのです。

結局私は、むなしさを感じなくて済む、実行可能な「生きる意味」を定めることによって、心のバランスをとるようにしました。私は理系の分野に関心があったので、将来の職業はその方面以外に考えられませんでした。ですから私は、物理法則を応用して、基礎的な技術を開発する研究を目指すことにしました。理想的なのは、半導体素子の発明のような研究だと思いました。このような仕事なら、すぐに価値がなくなることではなく、また、それなりに世の中の役にも立つとの考えでした。それより先のことについては、これを考えると何もできなくなるので、目をつむるしかありませんでした。

このように、何年かの間、私は「生きる意味」の問いを棚上げて過ごしていました。しかし、のちに、その問いの影響によって宗教的経験が起き、オウムに入信することになりました。その経緯については後述致します。

次に、「生きる意味」の問いが起る原因についてですが、以下のように、この種の問いは生理的不安定に起因することもあるようです。

思春期から十代後半(ときには二十代初めに入る)まで、成長しつつある人は重大な生理的不安定(すなわちストレス)を示す。ストレスホルモンは、後の成人時代の安定期に比較して有意に増加する。青年期に典型的な大きな気分の揺れは、この不安定さに結びついている。若者は取るに足らない欲求不満があると、

多幸感のある熱狂から自暴自棄的に落ち込むかもしれない。

人生のこの期間に問われる典型的な問いは次のものである。『それが一体何になるのか』

『人生より何か重要なことがあるのではないか』このもどかしい衝動は、自己認識の危機の問いで極まる。『私は一体何か』『何が現実か』(Persinger, Michael)

A 『Neuropsychological Bases of God Beliefs』Praeger, 1987)

また、心理学者のウイリアム・ジェイムズも、人生のあらゆる価値に対する欲望が失われていく「憂うつ」状態から、心休まることのない問いに駆り立てられ、人が宗教や哲学に向かうことを指摘しています。(ウイリアム・ジェイムズ『宗教的経験の諸相』梶田啓三郎訳 岩波文庫)

「生きる意味」に対する問いが純粹に知的なものならば、それは当人に健全な精神の成長をもたらすかもしれません。しかし、以上のような要因のものならば、無意味なことなので、自覚してそれに巻き込まれない必要があると思います。そのような心理に関する知識があるだけでも、ある程度の予防になるかもしれません。場合によっては、専門家に相談する必要もあるでしょう。特に、その問いにこだわりや煩わしさを感じるならば、注意すべきです。性急な解決を図りがちになり、それだけカルトに接近する危険があるからです。

それでも、「生きる意味」の問い―あるいは、ほかの問題―の解決を、宗教をはじめとするある思想に求めるならば、その選択には細心の注意を払うべきです。前述のように、その解決は「超越的世界観」に訴えざるを得ないので、その現実生活への影響が懸念されるからです。

ある伝統宗教などではそうだと思いますが、その安全性、有益性が歴史によって検証されている場合は問題ないでしょう。しかし、以下の要素を含むものについては避けるべきだと思います。

宗教的経験

カルトの「超越的世界観」によって、現実世界においては解決の困難な問題が解決することを述べました。他方、この類の世界観は非現実的であるために、受容が困難なものも事実です。ところが、「神秘体験」、「超越体験」などと呼ばれる幻覚的な宗教的経験は、その受容を著しく促進します。

オウムにおいても、教義の正当性の根拠は、その種の宗教的経験でした。つまり、多くの信徒は教義の世界を幻覚的に経験しており、その世界を現実として認識していたのです。地下鉄サリン事件への関与は誠に愚かであり、心から後悔しておりますが、この事件についても、宗教的経験から、私は教義上の「救済」と認識して行いました。このように、宗教的経験は、「殺人」を肯定する非現実的な教義さえ受容させる原因となります。したがって、宗教的経験を根拠とする思想やこれを起こす技術の使用には注意すべきです。

以下、宗教的経験の検討のために、私の経験を述べさせていただきます。

前述のように、高校三年生のときに、私は「生きる意味」の問題を意識するようになりました。しかし、その後、私は目を引いた本を読んだり、簡単な瞑想を指導する団体に入会したものの、その問題は棚上げ状態でした。大学で学ぶことが将来の職業に直結するので、学業や学費のためのアルバイトに忙殺されていたのです。

そのようなとき、偶然、私は書店で麻原の著書を見かけたのです。昭和六十三年二月ごろ、大学院一年のときでした。その後、関連書を何冊か読みましたが、彼の説く解脱・悟りが気になりました。

最終的な解脱・悟りは、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の境地であり、本来、私たちはその状態に安住していたにもかかわらず、煩惱にとらわれたために、輪廻して苦界をさまよい続けているとされてきました。ここで、絶対自由とは、カルマ（業）・転生する原因）から解放され、どの世界に転生するのも、最終解脱の状態に安住するのにも自由という意味でした。絶対幸福とは、金、名誉など自分以外の外的存在を必要としない幸福という意味でした。絶対歓喜とは、自己が存在しているだけで歓喜状態にあるという意味でした。

不明な点が多いものの、何らかの絶対的に幸福な境地の存在が事実であれば、その追求は「生きる意味」に値するのではないかと思いました。

また、麻原は修行を完成させて最終解脱の境地にあり、弟子を指導して彼らをも解脱させているとのことでした。麻原や弟子たちの体験談を読むと、解脱への確かな道が存在しているように思えました。彼らの体験には普遍性が感じられたからです。さらに、麻原は自身の体験の正当性を、ダライ・ラマ十四世をはじめとするチベット仏教やインドの聖者たちと交流して確認したとのことでした。

前述の解脱のような教義の話だけなら、フィクションを読んでいるようなものでしたが、このような実証的な姿勢は理解できることでした。この点は、私がそれまでに接した斯界のものとは違っていると思いました。

しかし、事はそう簡単に運びませんでした。麻原が主宰するのは、宗教団体「オウム真理教」だったのです。(なお、当時、オウムはほとんど無名の団体でした。)

私は新宗教に対して拒絶反応が起こるのを禁じ得ませんでした。「輸血拒否事件」、「霊感商法」……新宗教に関するマスコミ報道は、決まって言いようのない不快感を催すものでした。とりわけ、「輸血拒否事件」は、高校三年生のときに話を聞いた団体のことだったので、新宗教に対する問題意識が高まりました。

この事件の報道では、事故に遭った子供が「生きたい」と言っていたのにかかわらず、両親が教義に従い、輸血を拒否したとされていました。この団体の聖書の解釈が正しいという保証はないのだから——私にはほかの解釈も可能に思えました——、そのような不確実なことに基づいて命を犠牲にすることが信じられませんでした。ですから、この事件で、私の新宗教に対する不信は決定的なものになっていました。

このようなわけで、私は本を読む以上にオウムに近づけなかったのです。

ところが、本を読み始めた一週間後くらいから、不可解なことが起こりました。修行もしていないのに、本に書かれていた、修行の過程で起こる体験が、私の身体に現れたのです。そして、約一か月後の、昭和六十三年三月八日深夜のことでした。

眠りの静寂を破り、突然、私の内部で爆発音が鳴り響きました。それは、幼いころに山奥で聞いたことのある、発破のような音でした。音は身体の内部で生じた感覚があったものの、はるか遠くで鳴ったような、奇妙な立体感がありました。

「クンダリニーの覚醒——」

意識を戻した私は、直ちに事態を理解しました。「爆発音と共にクンダリニーが覚醒した」——読んでいたオウムの本の記述が脳裏に閃いたからです。クンダリニーとは、ヨガで「生命エネルギー」などとも呼ばれるもので、解脱するためにはこれを覚醒させる、つまり活動する状態にさせることが不可欠とされてきました。

続いて、粘性のある温かい液体のようなものが尾底骨から溶け出してきました。本によると、クンダリニーは尾底骨から生じる熱いエネルギーとのことでした。そして、それはゆっくりと背骨に沿って身体を上昇してきました。腰の位置までくると、身体の前面の腹部にパツと広がりました。経験したことのない、この世のものとは思えない感覚でした。

「クンダリニーの動きが正しくないと、クモ膜下出血を起こす」、「指導者なしの覚醒は危険だ」——オウムの本の記述は別世界の話でしたが、今や、我が身に起こりつつある現実でした。私はクンダリニーの動きを止めようと試みました。しかし、意思に反して、クンダリニーは上昇を続けました。

クンダリニーは、胸まで上昇すると、胸いっぱいに広がりました。ヨガでいうチャクラ(体内の霊的器官とされる)の位置にくると広がるようでした。クンダリニーが喉の下まで達すると、熱の上昇を感じなくなりました。代わりに、熱くない気体のようなものが上昇しました。これが頭頂まで達すると圧迫感が生じ、頭蓋がククツときしむ音がしました。それでも、私は身体を硬くして耐えるしかなす術がありませんでした。

突然の出来事に、どうなることかと思いましたが、それをピークに一連の現象は収束しました。どうやら、無事に済んだようでした。

「オウムは真実だ」

オウムの宗教的世界観が、一挙にリアリティーを帯びて感じられました。麻原をグル（修行を指導する師）として、解脱・悟りを目指すことが私の「生きる意味」であると確信しました。麻原の著書を読み始めて以来相次いだ体験に、彼に強い「縁」を感じていたからです。クンダリーナーが自然に覚醒したのは、前生のグルの著書を読んだために、修行者だった私の前生の記憶が甦ったからだと思いました。

このように、急激に宗教観念を受容して、思考体系が一変する心理現象は、「突然の宗教的回心」と呼ばれています。これと漸進的な宗教観念の受容との違いについて、研究論文には次のように述べられています。

突然の回心は、被験者そのものが全く変えられるように思われる経験として定義した。つまり、その変化は、被験者が生じさせるのではなく、彼にもたらされるように思われた。また、その変化は、被験者の生活様式、道徳的特性を形成する態度におけるものだった。

漸進的な宗教的発達には、上で説明したような回心体験がないという特徴のもので、そして被験者が自身を無信仰と識別したことがないものである。

すべての回心者は、疑いの余地なく、無信仰の状態から信仰深い状態になった。二つの集団の特色をかなりよく示す、二つの自伝を下に引用する。一人の突然の回心者は、彼の経験を次のように記述した。

この経験は、私が一四歳の秋に起きた。私は畑を耕して働いていた。突然、嵐が近づいたように思われ、そしてあたかも私の周りの全てが止まったようだった―私は神の存在を感じた。馬たちは完全に止まった状態になった。真つ黒な空がとどろいたので、私は祈った。嵐はすぐに通り過ぎたが、この瞬間だった、―私は祈りながら―主が望むならば、クリスチャンになり、主に仕える決心をしたのは。

漸進的な宗教的発達をした集団の一員は、彼の経験を次のように記述した。

私が信仰深いと自覚したときを説明するのは難しい。それに対し、何年前かに私は十ポンドで生まれ、そして現在はそのよりかなり重いという事実を説明するのは、全く簡単だろう。この成長には、出来事の印象がないわけではない。しかし、少なくとも回想では、そのプロセスはあまりに完全に連続したように霞んでいる。だから、私が自身の認識に現れた時点を思い出せる以上に、私は「信仰深く」なった時点を分離できない。私はその二つの出来事はほとんど同時に違うと思う。(John P. Kildahl, 1965, *The Personalities of Sudden*

Religious Converts, Pastoral Psychology, September, 37.)

このような宗教的回心は、人が葛藤状態にあるときに、幻覚的な超越体験と共に起こることがあり、このとき葛藤が解決するとされています。また、突然の宗教的回心

においては、常識から非常に逸脱したビリーフ・システム (belief system 思考・意思決定の体系) が受容されたり、奇妙で破壊的な適応に至ったりする場合があります。それです。そして、「カリスマグループの一つの注目せざるを得ない特徴は、入会の特徴がしばしば劇的な回心の経験であることだ」といわれています。(Marc Galanter. 1996. *Cults and Charismatic Group Psychology*. In Edward P. Shafranske Eds., *Religion and the Clinical Practice of Psychology*. American Psychological Association.)

私の場合、「生きる意味」に係わる葛藤のために回心が起き、オウムの教義体系が受容されました。このように、非現実的な世界観が突然現実として感じられ、それが受容されることがあるので、超越体験に基づく世界観には要注意でしょう。後述のように、それが日常生活との間に摩擦を生じる場合は問題が起こるからです。

オウムの宗教的世界観が現実となった私に、入信以外の選択はありませんでした。また、新宗教うんぬんといっていられる状況ではありませんでした。クンダリニーが覚醒した以上、指導者は不可欠だったからです (本文13〜14ページ、43ページ)。私はクンダリニーをコントロールできず、頭蓋がきしんでも、なす術がなかったのです。この状況について、ある共犯者は、「広瀬君は、本を読んだだけでクンダリニーが覚醒し、困って教団に相談に行つたと言っていた。ある種の困惑を広瀬君から感じた。」と法廷証言しています。

こうして、オウム真理教の在家信徒としての生活が始まりました。在家信徒は、社会生活をしながら、教義の学習、守戒など教義の実践、ヨガの行法、奉仕などの修行をすることが基本でした。

オウムの教義と修行の目的について、あとの話の理解のために必要な部分のみ説明致します。

教義において、修行の究極の目的は前述 (本文11ページ) の最終解脱をすること、つまり、輪廻から解放されることでした。なぜ解脱しなければならないのか―それは、輪廻から解放されない限り苦が生じるからだ、と説かれていました。これは、今は幸福でも、幸福でいられる善業が尽きてしまえば、これまでに為してきた悪業が優位になり、苦しみの世界に転生するということでした。特に、地獄・餓鬼・動物の三つの世界は三悪趣と呼ばれ、信徒の最も恐れる苦界でした。

それに対して、解脱はすべての束縛から解放された崇高な境地でした。解脱に至るには、次のように、私たちが本来の最終解脱の状態から落下していった原因を除去していくことが必要と説かれていました。

私たちは自己が存在するだけで完全な状態にあったにもかかわらず、他の存在に対する執着が生じたために輪廻転生を始めたときれていました。それ以来、私たちは煩惱 (私たちを苦しみの世界に結びつける執着) と悪業を増大させ、それに応じた世界に転生して肉体を持ち、苦しみ続けているとのことでした。たとえば、殺生や嫌悪の念は地獄、盗みや貪りの心は餓鬼、快楽を求めることや真理 (精神を高める教え) 才

ウムの教義)を知らないことは動物に、それぞれ転生する原因になるとされてきました。

これらの煩惱と行為は、過去世のものも含め、情報として私たちの内部に蓄積しているとのことでした。この蓄積された情報が「カルマ(業)」でした。そして、「悪業に応じた世界に転生する」というように、自己のカルマが身の上に戻ってくることを「カルマの法則」といい、これも重要な教義でした。

カルマの法則から考えると、解脱、つまり輪廻からの開放に必要なのは、転生の原因となるカルマを消滅(浄化)することになります。ですから、オウムにおいては、カルマの浄化が重視され、修行はそのためのものでした。

「なお、前述の「殺生」は、虫を殺すことも含みます。ですから、そのほかに挙げた行為もそうですが、一般人の日常的な行為はほとんどが悪業となります。したがって、信徒についても、入信前は悪業を為してきたことになり、それらを浄化しない限り苦界に転生することになります。だから、信徒たちは必死に修行していました。また、家族など周囲の非信徒たちは苦界への転生が避けられないことになり、それを信徒たちは案じていました。後述しますが、日常生活と相容れないこの教義のために、一般社会は苦界への転生に至らせる世界とみなされました。そのために、信徒は一般社会を離れて出家していきました。さらに、苦界へ転生する現代人を救済する目的で、殺人まで犯すことになりました。」

また、オウムの教義において、麻原は「神」といえる存在でした。それは、最終解脱者であり、様々な「神通力」を有するとされていたからです。特に麻原は人を解脱させたり、高い世界(幸福な世界)に転生させたりする力があると主張していました。私たちに「エネルギー」を移入して最終解脱の状態の情報を与え、代わりに、苦界に転生する原因となる悪業を引き受ける―「カルマを背負う」といつていました―と説いていたのです。カルマを浄化しないと苦界に転生するので、カルマを背負ってくれる麻原は、まさに「救済者＝神」でした。

麻原の指示が絶対だったのも、そのような「救済」の能力を有するためでした。オウムの世界観においては、苦界への転生の防止が最優先であるところ、麻原の指示の目的は、苦界へ転生する人類の救済とされていたのです。

回心による教義の受容の後、入信してからは、私の身の上に個々の教義の体験が現われ、教義の世界観に対するリアリティがますます深まりました。たとえば、入信の一週間後に、麻原の「エネルギー」を感じる体験が現われました。麻原の「エネルギー」を込めたとされる石に触れたところ、気体のようなものが私の身体に入ってきました。そして、胸いっぱいになり、倒れそうになったのです。そのときは、ハッカを吸ったような感覚がして、私は自身の悪業が浄化されたと思いました。

その後も様々な形でこのような体験を重ねたので、私にとって、麻原が「カルマを背負う」能力を有することは現実でした。そのために、麻原は「神」であり、その

指示は絶対だったのです。

なお、現在は、この種の経験は暗示の機制による幻覚と理解しています。つまり、以前に接していた「エネルギーを移入してカルマを浄化する」という教義（本文19ページ）が暗示になり、「エネルギーを込めた」とされる石に触れたところ、教義どおりの幻覚が現れたものと思います。（このように、回心後は幻覚的経験が極めて起きやすい状態になっていました。）

「なぜあの男が」―麻原の地位が教団内で絶対だったことに対する疑問の声をよく聞きます。その理由の一つは、私と同様に、信徒にとつては麻原を「神」とする教義の世界観が現実だったことでしょう。ヨガの行法によって、多くの信徒が教義どおりの宗教的経験をしていたのです。

現役信徒は、今も、麻原の力でカルマが浄化されると感じる体験をしているようです。だから、麻原が法廷でどんなに見えるに堪えない振る舞いをして、彼は「神」であり続けているのです。私もそうでしたが、信徒が帰依しているのは生身の麻原ではなく、宗教的経験によって知覚した麻原です。「現実」よりも、「宗教的経験」のほうがリアリティがあるのです。

このような宗教的経験の作用について、文献には次のように述べられています。

アメリカで（そしてしばしば国際的に）現在見られる多くのカルト様のビリーフ・システムを概観することは、臨床医が特定のセクトを正しく評価するにあたり役に立つ。ビリーフ・システムは、一般に部外者を困惑させるもので、多くは超越体験や神秘体験に基づいている。あるものは、なじみのない東洋の伝統から得ている。あるものは、教義を再構築する程度にまで、既存の宗教を粉飾する。

超越体験あるいは神秘体験は、回心のプロセスにおいてしばしば重要だが、このことはジェイムズとフロイトが注目した。葛藤の解決における超越体験は、非精神病患者と精神病患者の両方に急性の幻覚的エピソードが起こる程だが、この重要性も強調されてきた。これらの経験はまた、カリスマセクトの多くの会員にとつて、グループの会員を続けさせる総体である。これらの出来事は、類似した現象を経験したことのある他の人たちとの友好関係を、最高潮に高める強力な感情的経験になる。

宗教的経験のコンテクストにおける精神病様超越現象が生じることを説明できるモデルは、まだ開発されていない。しかし、注目すべきなのは、かなり注意を引く知覚現象を、これらのセクトの会員が普通に報告することである。たとえば、一つのグループの百十九人の会員のうちの三十パーセントが、瞑想中に幻覚様経験を報告した。明らかに、このような現象は、心理学者が正常な精神的プロセスのみならず病的プロセスを理解するのにもかなりの影響があるはずだ。それらはたぶん、精神病といわれる人に幻覚状態を起こすあるコンテクストの性質を、心理学的に理解する助けになるだろう。（前出Galanter）

（A教団は）夢さえも「お父様（教祖）の夢を見ますよ」などと暗示を与えて教

祖の夢を見やすいように誘導したりする。それらのプライミングの結果、信者は身辺でおきる現象がすべて神やサタンといった心霊現象ととらえることになっていると思われる。さらに、こうした経験が西田のいう個人的現実性を高める。つまり体験や推論が教義と整合しているという認知を与え、ビリーフは強化される。(西田公昭1995 ビリーフの形成と変化の機制についての研究(4) 社会心理学研究一一、一八―二九)

(注 プライミング―特定の情報に接触させることによって、人間の情報処理を一定の方向に誘導すること)

瞑想のより高い段階は多くの経験を含む。これは、伝統的な文献によく載っており、明るい光のヴィジョン、身心の喜びに満ちた陶酔感、静けさ、明晰な知覚、および愛や献身の感情を様ざまに含む。「超意識」、「超越体験」、「神秘体験」、あるいは「クンダリーナの覚醒」と名付けられており、これらの状態は、人を引き込む影響を及ぼす。この影響は、瞑想の伝統によれば非常に深刻になるものだ。(Mark D. Epstein and Jonathan D. Lieff, 1981, Psychiatric Complications of Meditation Practice. The Journal of Transpersonal

Psychology, 13, 137-147.)

また、宗教的経験が起こる状態においては、世俗的なことに対する関心が薄れるという報告があります。(Raymond Prince and Charles Savage, 1966, Mystical States and the Concept of Regression. Psychedelic Review, 8.)

以上のように、宗教的経験およびそれが起こる状態は、非現実的な教義の受容や日常生活からの離脱を促進するようです。

オウムの信徒制度には、在家のほかには出家がありました。オウムの出家とは、世俗的な関係を一切絶ち、麻原に全生涯を捧げ、人類の救済―最終的には解脱させること―と自己の解脱に専念することでした。

出家者は、教団施設内で共同生活をするようになります。家族とも絶縁の形になり、解脱するまでは、会うことも、連絡することも禁止でした。財産はすべて教団に布施し、私物として所有できるのは、許可されたもののみでした。飲食できるのは給与されるもののみで、通常、外食は禁止でした。本、新聞、テレビ、ラジオなど、教団外は一切の情報に接することも禁止でした。これらの戒は、苦界に転生する原因となる執着を切るためのものでした。

入信時、私は出家をまったく考えていませんでした。長男という立場上、親の老後を見たいと思っていたからであり、また、私が出家すると家庭が崩壊しかねないとも思っていたからです。そもそも、入信前に読んだ麻原の著書によると、在家でも解脱可能だったので、そのような無理をしてまで出家する必要を感じませんでした。

自分が培ってきたものを崩すのは真に恐いことです。入信間もないころ、私はある在家信徒と話をしました。彼は出家の準備のために定職を捨て、アルバイトをして暮らしていました。その話を聞き、私は恐怖心さえ抱いたのです。実際、昭和六十三年十月の私について、母は「就職の内定を喜び、安心して居る様子だった」旨法廷証言しており、その時点で出家の意思は皆無でした。

ところが、私は出家することになりました。私の入信後、勢力拡大のために、オウムが出家者の増員を図ったのです。私の入信前の一年半の間に約六十人が出家したのに対し、入信後の一年間には約二百人が出家しました。

「現代人は悪業を為しているために来世は苦界に転生する。世紀末に核戦争が起こる。」――麻原は人類の危機を叫びました。そして、その救済のためとして、信徒に布教活動をさせたり、さらに、出家の必要性を訴え、多くの信徒を出家させたりしました。

このように、一般社会は苦界への転生に至らせる世界として説かれていましたが、それを聞いていたうちに、そのとおりの体験が私に起こりました。

私の公判において、友人が次の証言をしました。昭和六十三年晩秋か初冬に私が話した内容です。

街中を歩くとバイブレーションを感じることに、電車内のいかがわしい広告を見ると頭が痛くなること、繁華街の近くにいると体調がおかしくなるという話がありました。

当時、私は街中を歩いたり、会話をするなどして非信徒の方と接したりすると、苦界に転生するカルマが移ってくるのを感じました。この感覚の後には、気味悪い暗い世界のヴィジョン（非常に鮮明な、記憶に残る夢）や自分が奇妙な生物になったヴィジョン―カンガルーのような頭部で、鼻の先に目がある―などを見ました。この経験は、カルマが移り、自身が苦界に転生する状態になったことを示すとされてきました。さらに、体調も悪くなるので、麻原がエネルギーを込めた石を握りながら、カルマを浄化するための修行をしなければなりませんでした。

また、一般社会の情報は煩惱を増大させて、人々を苦界に転生させると説かれました。そのために、情報によっては、接すると頭痛などの心身の変調が起きたのです。

他方、当時、日常的に麻原からの心地よいエネルギーが頭頂から入って心が清澄になり、自身のカルマが浄化されるのを感じました。

これらの経験によって、一般社会が人々のカルマを増大させて苦界に転生させるのに対して、麻原だけがカルマを浄化できることをリアルに感じました。そのためには、麻原の説くとおりに、一般社会で通用する価値観は苦界に至らせると思うようになり、解脱・悟りを目指すことにしか意味を見出せなくなりました。

この状況に関連することとして、検察官の「広瀬から出家の原因、理由を聞いたことがあるか」との確認に対して、私の指導教授は「結局、神秘体験だと言っていた」と法廷証言しています。（当時、私は教授にも入信勧誘していたのです。）

また、出家することが、苦界に転生する可能性の高い親を救うことになるとも思う

ようになりました。子供が出家すると、親の善業になるとされていたからです。出家にあたり一番の障害は親子の情ですが、それを除くために、オウムではそのように説かれていたのです。

こうして、私は出家願望を抱くようになりました。世紀末の人類の破滅というタイム・リミットをにらみながら、家族の説得に要する期間や就職が決まっていた事情なども考慮して、二、三年後の出家になると思っていました。

このような昭和六十三年の年末、私は麻原から呼び出されました。麻原は、救済が間に合わない、もう自分の都合を言っていられる場合ではないと、出家を強く迫りました。私は麻原に従い、大学院修了後に出家する約束をしました。そして、平成元年三月末に出家しました。

私の出家後、平成元年の四月から、麻原は「ヴァジラヤーナ」の教義に基づく救済を説きはじめました。現代人は悪業を積んでおり、苦界に転生するから、「ポア」して救済すると説いたのです。「ポア」とは、対象の命を絶つことで悪業を消滅させ、高い世界に転生させる意味です。この「ポア」は、前述（本文19～20ページ）のように、麻原に「カルマを背負う―解脱者の情報を与え、悪業を引き受ける―」能力があることを前提としています。

その初めての説法において、麻原は仏典を引用して、「数百人の貿易商を殺して財宝を奪おうとしている悪党がいたが、釈迦牟尼の前生はどうしたか」と出家者に問いました。私は指名されたので、「だまして捕える」と答えました。ところが、釈迦牟尼の前生は、悪党を殺したのです。これは、殺されるよりも、悪業を犯して苦界に転生するほうがより苦しむので、殺してそれを防いだという意味です。それまでは、虫を殺すことさえ固く禁じられていたので、私にはこの解答は思いつきませんでした。しかし、ここで麻原は、仏典を引用して「殺人」を肯定したのです。

ただし、このときは、直ちに「ポア」の実践を説いたわけではありませんでした。最後は、「まあ、今日君たちに話したかったことは、心が弱いほど成就は遅いよということだ」などと結んでいます。私も、実行に移すこととは到底思えませんでした。

ところが、麻原は説法の内容を次第にエスカレートさせていきました。その後の説法では、「末法の世（仏法が廃れ、人々が悪業を為して苦界に転生する時代）の救済を考えるならば、少なくとも一部の人間はヴァジラヤーナの道を歩かなければ、真理の流布はできないと思わないか」などと訴えています。それに対し、出家者一同は「はい！」と応じており、「ポア」に疑問を呈する者は皆無でした。『ヴァジラヤーナコーズ教学システム教本』―教団発行の説法集より）

前述（本文20～21ページ、25～26ページ）のように、私にとっては、現代人が苦界に転生することと、麻原がそれを救済できることは、宗教的経験に基づく現実でした。ですから、私は「ヴァジラヤーナの救済」に疑問を抱くことなく、これを受容しました。なお、麻原は、私が述べたような宗教的経験を根拠として、この教えを説いてい

ました。

さらに、私はいわゆる幽体離脱体験（肉体とは別の身体が肉体から離脱するように知覚する体験）などもあったので、私たちの本質は肉体ではなく、肉体が減んでも魂は輪廻を続けるとの教義を現実として感じていました。そのために、この世における生命よりも、よりよい転生を重視するオウムの価値観に同化していました。このことも、「ヴァジラヤーナの救済」を受容した背景だと思えます。

このような説法が展開されていたとき、私は解脱・悟りのための集中修行に入りました。第一日目は、立位の姿勢から身体を床に投げ出しておの礼拝を丸一日、食事も摂らずに不眠不休で繰り返しました。このときは、熱い気体のような麻原の「エネルギー」が頭頂から入るのを感じ、まったく疲れないで集中して修行できたので驚きました。

この集中修行において、最終的に、私は赤、白、青の三色の光をそれぞれ見て、ヨガの第一段階目の解脱・悟りを麻原から認められました。特に青い光はみごとで、自分が宇宙空間に投げ出され、一面に広がる星を見ているようでした。これらの光は、それに対する執着が生じたために、私たちが輪廻を始めたときとされるものでした。その輪廻の原因を見極めることは、輪廻から脱した経験（＝解脱）を意味しました。

解脱・悟りを認められた後は、以前は身体が固くてまったく組めなかった蓮華座（両足首をももの上に載せる座法）が組めるようになりました。教義によると、これはカルマが浄化された結果と考えられました。また、食事が味気なく、砂でも噛んでいるように感じ、食事に対する執着が消えたように思えました。さらに、小さなことにこだわらなくなり、精神的に楽になりました。

以上は麻原の「エネルギー」を受けた結果のように思われたので、彼が人のカルマを浄化して解脱・悟りに導くことの実体験になりました。

平成二年四月、麻原は古参幹部と理系の出家者計二十人に対して、極秘説法をしました。冒頭、「今つくっているもので何をやるか分かるか」と私に問いました。しばらく前から、何らかの菌の培養を指示されていたのです。目的は聞かされませんでした。指示の雰囲気から、危険な菌らしいことは分かりました。私は、「ヴァジラヤーナの救済」をする旨を答えました。一年間説法されて、その実行が当然のことのようになつていたのでです。

麻原は、「そうか、分かっていたのか」と言い、「ヴァジラヤーナの救済」の開始を宣言しました。

「衆院選の結果―平成二年二月の衆院選に、麻原ら教団関係者二十五人が出馬し、全員が落選―、現代人は通常の布教方法では救済できないことが分かったから、これからはヴァジラヤーナでいく」

そして、麻原が指示したのは、猛毒のボツリヌス毒素を大量生産し、気球に載せて世界中に散布することでした。私たちは、その場で各人の任務も指示され、直ち

に作業に取りかかったのです。私はボツリヌス菌の大量培養―容量十立方メートルの水槽四基―の責任者でした。

作業は過酷でした。ヴァジラヤーナの救済になると麻原は血道を上げるので、指示を受ける私は寝る暇もないことがありました。私は約三か月間教団の敷地に缶詰めされ、風呂にも二度しか入れませんでした。それも、関連部品の購入のために業者を訪問するときなどに、指示されての入浴でした。そして、安全対策も杜撰で、非常に危険な状況での作業でした。結局、種菌さえできていなかったことが後で判明したのですが、できていたら私たちが真先に死んでいたと思います。

私たちは、一般社会では無差別大量殺人とみなされる行為を指示され、しかも厳しい作業が続きましたが、誰も疑問を口にすることなく、淡々と行動していました。外部の人が見たら、殺人の準備をしているとは思えなかったでしょう。

それは、私たちにとつて、「ヴァジラヤーナの救済」に係わる教義（本文27～29ページ）が、宗教的経験に基づく現実だったからです。そして出家後も、次のように、そのリアリティは深まるばかりでした。

一般社会が苦界への転生に至らせることに関しては、出家後初めて外出したときに、以前に経験のないほど激しくカルマが移ってくるのを感じて（本文25～26ページ）、危機感を覚えました。出家者に対して外部との接触を厳しく制限するなど、教団が外部の悪影響を警戒していたことが暗示になったのだと思います。また、テレビ・コマースナルを視聴したところ、その音楽のイメージが頭の中でぐるぐると繰り返されるようになり、集中力が削がれる経験がありました。それは、選挙運動中に、麻原の指示でオウムに関する報道を録画したときのことでした。私の変調に気付いた麻原が、「現世の情報が悪影響を与えている」と作業の中止を指示したので、一般社会の発する情報への警戒心が強まりました。

一方、麻原の救済能力に関しては、その「エネルギー」によって解脱・悟りに導かれたと感じる経験をしたために、さらに奥深さを知った思いでした。

ボツリヌス毒素散布計画が中止された後、私は集中修行に入りました。そして、自分の意識が肉体から離れ、上方のオレンジ色の光に向かう経験などをして、ヨガの第二段階目の解脱・悟りを麻原から認められました。また、認められたその場で、毒ガスホスゲンの生産プラントの製造計画（平成二年十月から三年八月、中止―オウムでは、次の計画の指示が入り、前の計画が中止されることが多かった）に加わるよう指示されました。その後も、プラズマ兵器、レーザ兵器の開発（同四年十一月から五年十二月、中止）、ロシアにおける武器調査（同五年二月と五月）、炭疽菌の散布計画（同五年五月から六月、失敗）、オーストラリアにおけるウラン調査（同五年九月）、自動小銃AK74千丁の製造（同六年二月から七年三月、一丁完成、逮捕のため中止）などを麻原から指示されました。

このように、オウムにおいては、「ヴァジラヤーナの救済」の実践は日常的なことでした。

そして、平成七年三月、私たちは地下鉄にサリンを散布する指示を村井秀夫から受けました。麻原の意思とのことでした。その指示は、当時の私には、苦界に転生する人々の救済としか思えませんでした。一般人が抱くであろう「殺人」というイメージがわかかなかったのです。

地下鉄サリン事件に関するある共犯者の調書を読むと、私たちが事も無げに行動している様子が散見されます。そのような記述を読むと、残酷な事件を平然と起こしたことについて、自らのことですが戦慄さえ覚え、被害関係者の皆さまに対しては心から申し訳なく思います。誠に愚かなことでしたが、オウム宗的世界に没入している状態でした。

「ただし、私は決して軽い気持ちで事件に関与したわけではありませんでした。救済とはいえ、「ポア」の行為そのものは、通常の殺人と同様に、悪業になるとされていたからです。それまではカルマの浄化に努めてきた（本文18～19ページ）のですが、救済のためにカルマを増大させる行為をすることが「ヴァジラヤーナの救済」と意味付けられていたのです。そのカルマは、修行によって再び浄化する必要がありました。さもないと、「カルマの法則」によって、自身に戻ってくるとされていたからです。実際、地下鉄から下車した後、私は突然ろれつが回らなくなり、サリン中毒になったことに気付いたのですが、そのときは「カルマが返ってきた」と思いました。」

以上のように、オウムにおいては、非現実的な教義が宗教的経験によって受容されました。そして、その教義が社会通念と相容れないものだったために、逸脱した行動がなされました。

他方、「禅」も宗教的経験を起こす技法を用いますが、「悟了同未悟―悟り終われば凡夫に立ち返る―」という教えがあります。これは、「禅」の瞑想技法によって起こる日常生活への不適應（本文23ページ）を防ぐ安全装置ではないでしょうか。何代にもわたって存続している宗教には、問題が起こるのを回避する知恵の蓄積があるのだと思います。

宗教的経験を起こす技法やその経験に基づく思想に係わる場合は、その弊害の予測が困難なので、このように経験的に安全性が保障されていることを確認する必要がありますでしょう。

また、私は宗教的経験によって教義の検証が可能と思ひ、オウムに関心を持ったのですが、それは大きな誤りでした。人間の感覚は、決して常に真実を反映しているわけではありませんでした。神秘体験の心理状態は次のようにいわれており、幻覚を真実と認識してしまうこともあるのです。

神秘的な状態は比量的な知性では量り知ることのできない真理の深みを洞察する状態である。それは照明であり、啓示であり、どこまでも明瞭に言い表わされないながらも、意義と重要さとに満ちている。そして普通、それ以後は、一種奇妙な権威の感じを伴うのである。（前出ジェイムズ）

幻覺的な宗教的經驗によつては、決して「客觀的」な眞実は檢証できません。できるのは、「主觀的」に教義を追体験することだけです。それ以上のものではありません。

ですから、宗教的經驗はあくまでも「個人的」な眞実として内界にとどめ、決して外界に適用すべきではありません。オウムはそれを外界に適用して過ちを犯したのです。

恐怖心の喚起

恐怖心を喚起する思想も極めて有害です。オウムにおいては、信徒の思考や行動が教義に沿うものに著しく制限されました。

ただし、その思想に触れて間もないうちは、恐怖心を喚起する部分が含まれていても、それに気付かないかもしれません。私自身も、クンダリニーの覚醒前は、麻原の著書の地獄・餓鬼・動物などの記述はまったく気になりませんでした。

その経験を振り返りますと、私の話がどれだけ伝わったか心もとなくになります。信徒の心理において、苦界へ転生する恐怖からの回避は無視できない要素なので、その恐怖が実感できないと、信徒特有の思考や行動は理解が困難だろうからです。実感は難しいかもしれませんが、その恐怖のために、たとえ自身の生命や健康が損われる事態に直面しても、悪業となる行為はまったくできません。私の経験としては、次のことがありました。

地下鉄サリン事件のとき、私がサリン中毒になったので、あらかじめ指示があったとおりに、送迎役の信徒が車で教団の付属病院に連れて行ってくれました。ところが、病院関係者に話が伝わっておらず、事情がわからないようでした。しかし、私はサリン中毒と伝えられませんでした。「ヴァジラヤーナの救済」の任務に関することを関係者以外に話すと悪業になったからです。結局、私は病院での治療を断念し、医師の林郁夫のいる集合場所に行き、治療を受けました。

また、地下鉄サリン事件で逮捕された後、教団の指示どおりに当番弁護士を一回お願いして、拘留場所を教団に伝えましたが、右と同じ理由で事件に関する相談はできませんでした。常識的には、弁護士に相談しながら取り調べを受けます。また、それをしてはいけないことは、連日十時間の取り調べが続くなか、自らを孤立させることになるかとされています。

これらのことは、重大事件で逮捕された状況において、極めて不利です。しかし、悪業となる行為はできませんでした。

さらに、事件の動機である「ヴァジラヤーナの救済」の教義と麻原の地下鉄サリン事件への関与については、供述すると無間地獄（宇宙の創造から破壊までより長い期間苦しむ地獄）に転生しかねないので――また、この教義を聞く資格のない人に話すと誤解され、その人が将来にわたって救済されなくなるともいわれていました――、この事件の捜査期間内には供述できませんでした。

取り調べの最終日、事件の核心部分を追及する検察官と、悪業を犯すまいとする私との間に必死の攻防がありました。

問 麻原尊師のことや事件の動機、目的も話さなければ、反省したとはいえないのではないか。

答 ……

問 話せない理由は何か。

答 お話しできません。

問 では、こちらから質問する。今回の事件はヴァジラヤーナの教義に基づいたものではないか。

答 答えられません。

問 ヴァジラヤーナでは、「ポア」のために他人の命を絶つことも許されるのではないか。

答 答えられません。

問 その教えを麻原尊師が説かなかったか。

答 答えられません。

問 麻原尊師の指示は、いかなるものでも絶対に従わなければならなかったのではないか。

答 必ずしもそうではありません。

問 では、どういう場合に従わなくいいのか。

答 何ともいえません。

問 ほら、やはり従わなくてはならないんじゃないか。今回の事件は、麻原尊師の指示ではないか。

答 黙秘します。

問 村井正大師は、サリンを撒くと切り出したとき、それが麻原尊師の意向であることを話さなかったか。

答 黙秘します。

問 今回の事件の後で、君は麻原尊師に事件の報告をしていないか。

答 黙秘します。

問 (ある信徒が描いた図を見せながら) ○○が図まで描いて、君たちが報告したことを話しているのに話さないのか。君は、今回の事件に関与した仲間については話しているのに、なぜ事件の目的や動機、報告については話さないのか。

答 答えられません。

問 君が黙秘するのは、それが麻原尊師に関係する部分だからではないのか。

答 黙秘します。

当時は、なるべく悪業にならないように、教団とは無関係なこととして、地下鉄サリン事件における自身の行為はすべて供述していました。しかし、自身のことを供述しても、事件の動機や麻原の関与を供述しなければ反省してないとみなされ、身を滅ぼしかねない状況でした。加えて、質問の内容から、検察官がそれらのことを既に知っていることは分かり、一般的見地からは、私が供述しても誰にも影響しないことは十分に理解できる状況でした。それでも、金縛りにでもあったかのように、供述できなかつたのです。

以上のように悪業とされる行為ができなくなる傾向は、クンダリニーの覚醒直後に現れました。オウムに入信する段になって気に掛かったのは、「複数のグル（修行の指導者）の指導を受けると、その異なるエネルギーの影響で精神が分裂する」との麻原

の著書の記述でした。当時、私はある瞑想団体に入会していたからです。私は不安になり、クンダリニーが覚醒したその日に、団体に脱会届を郵送しました。

また、私は釣りが好きだったのですが、それは悪業になるので、クンダリニーの覚醒以来一度も行いませんでした。そのほか虫も殺せなくなるなど、恐怖のために、教義で悪業とされる行為はできなくなったのです。

このような状態は、次のように、宗教的回心において現れるといわれています。

私たちはある思想を繰り返し繰り返しだき、ある行為を繰り返し繰り返しおこなっている。しかし、その思想の真の意味が、ある日はじめて、私たちのなかに響き渡るのである。あるいは、その行為が、突然、道徳的に不可能なことに変じているのである。(前出ジエイムズ)

オウム信徒には、同様に、悪業を為すことに強い抵抗を感じる者が多数いました。このような宗教的悪業の教義に関して、文献では次のことがいわれています。

さらに、宗教が単独で精神的問題を引き起こす場合がある。フロイトが主張するのは、「イド」と「スーパーエゴ」とのせめぎ合いにおいて、宗教はスーパーエゴの側に立つということである。宗教の戒律や禁制は、性的衝動や攻撃的衝動を抑制する目的がある。さらにまた、宗教は完全な道徳を目指しているのです。これらの掟に対する違反は罪悪感を引き起こす。極端な場合、罪悪感が生活を支配し、麻痺させることがある。また、しばしば、過度の後悔に至ることもあり、中世鞭打苦行派の罪の意識による鞭打ちから現代テレビ時代における罪の公然の告白にまで及ぶ。

オランダにおいて、罪への自責心の問題をアライト・シルダーが研究した。彼女の研究『罪の意識に苦しむ以外なすべがない』は、厳格な一部のオランダプロテスタントに関するもので、罪悪感もたらしうる、人の仕事、思考および行動を麻痺させる影響への洞察を与えた。(M. H. F. van Uden and J. Z. T. Pieper. 1996. *Mental Health and Religion : A Theoretical*

Survey. In Halina Grzymala-Moszczynska and Benjamin Beit-Hallahmi Eds., *Religion, Psychopathology and Coping*. Rodopi.)

友好関係を生じることに加えて、カリスマグループは個人的および社会的行動を規制する行為の基準を確立する。絶縁したセクトの状況では、このような外的規制によって、集団は心理学的に困難な支配の操作がしやすくなる。多数のセクトの行動規範は、現在の性的に寛大な態度に対する反動形成を反映するように見える。これらの規範は、しばしば多くの儀礼化された集団防衛を採用するだけで維持される。たとえば、ハーダー、リチャードソン、およびシモンズは、ジーザス運動の一つの分派における、求愛、結婚、および家庭の形態を研究した。彼らは、会員が性的にとがめられかねない状況を明確に回避することを述べ、そして、求愛と肉体的快楽に関するセクト特有の規制の概要を説明した。たとえば、デー

トをすることは不適切と考えられたが、それが誘惑や罪に至りかねないからだ。セクトに入会中の人の態度の同様な変化は、前に述べた統一協会の会員に関する研究に現れた。その七十六パーセントが性について考えることを「非常に」避けたと述べたが、入会の前には十一パーセントしかそのように感じなかったと報告した。したがって、集団心理は本能の要求の表出の統制やそのほかの葛藤の統制に重要な役割を果たす。(前出Galanter)

以上のように、宗教的悪業を規定する教義には、人の思考や行動を強く統制する作用があるとされています。

そして、オウムの教義にもまた、ある思考や行動を宗教的悪業として規定するものがありました。たとえば、私が出家した直後の平成元年四月二日、麻原は次の内容の説法をしています。

「わたしたちの修行を妨げる眠気、貪り、怒り、真理（オウムの教義と考えていただいて差しつかえありません）を否定したくなる気持ちは悪魔であり、取り返しのつかない迷いの生を繰り返す」

「現代人は快楽を追求し、真理の実践をしていないので、三悪趣（地獄・餓鬼・動物）に生まれ変わる」

「説法を復習せず、聞き流すとサマナ（出家者）をやめるという結果になり、迷いの生に入り、三悪趣に生まれ変わる」

また、クンダリニーが覚醒すると、「魔境」に入りやすくなるとされています。これは、「これ以上ない人生の挫折」、「生まれ変わっても続いてしまう恐ろしい修行の挫折」とされる状態です。そして、「魔境」に落ちないためには、「正しいグル（解脱した指導者）を持つ」、「功德（神とグルに対する布施と奉仕）を積む」、「強い信を持つ（グルと真理を強く信じる）」、「真理の実践をする」ことが必要と説かれています。

（麻原彰晃著『超能力秘密の開発法』、『生死を超える』、『マハーヤーナ・ストラ』）
この類の教義はほかにも多数ありましたが、これらは信徒にとって、麻原、教団、あるいは教義からの離脱を困難にし、そして、麻原や教義に従うよう思考や行動を統制するものでした。このような作用は、信徒が違法行為の指示に従ったり、事件が明らかになった後でも脱会しなかったりする原因の一つだと思います。

私が教義に疑問を抱き、脱会に至るまでには、次のように、悪業とされる行為をすることへの慣れが必要でした。

逮捕された後、供述すると悪業になる内容について、私は取調官の追及を受けるようになりました。しかし、それでも、はじめはまったく供述できない状態であり、追及の外力に身を引きちぎられるように感じました。そのような状況において、私は軽度の悪業となる内容から少しずつ供述せざるを得ませんでした。

私が最初に話したのは、地下鉄内で自身がサリンを発散させた単独行動の部分でした。事件に関してかなりのことが既に明らかになっていた状況であり、個人的な行為として供述するならそれほど悪業にならないと思っただけです。

その後、黙秘と供述を何度も繰り返して、長期間かけて動機の「ヴァジラヤーナの救済」の教義のことや麻原の事件への関与について供述できるようにしました。

以上のように、自覚しないうち（本文40ページ）に恐怖を喚起する教義の影響を受ける場合があります。また、宗教的悪業を規定する教義そのものに興味を抱いてオウムに係わることは考え難いですが、多くの信徒がそのような関心の教義を受容し、思考や行動が制限されていきました。ですから、そのときは実感がわかなくても、「地獄」など恐怖の喚起が予測される概念を強調する思想には、近づくべきではないでしょう。

規範意識を変容させる集団

これまで、「宗教的経験」、「恐怖心の喚起」について述べさせていただきました。次に、これらを基礎とする思想に沿うように個人の規範意識を変容させ、常識から逸脱した思考や行動をさせる集団の作用について補足致します。

オウムにおいては、集団の作用によって、教団の規範に客観的現実性が付与され、さらに、信徒の規範意識が変容したと思われまます。

オウムの信徒の多くは、教義どおりの宗教的経験をしていました。そのため、次のように、宗教的経験そのものの「個人的現実性」に「社会的現実性」も加わり、信徒は個人的で非現実的な宗教的経験を客観的現実であるかのように認識していました。

現実性とは、当該の所信の内容が客観的現実としてあたかも存在しているような感覚の程度であり、個人的現実性と社会的現実性の二つを仮定する。個人的現実性とは、当該の所信の内容が直接知覚や論理的推論といった個人的経験を通過して客観的現実としてあたかも存在しているような感覚の程度である。社会的現実性とは、当該の所信の内容が他者の経験や他者によって合意されているといった間接的経験を通過して客観的現実としてあたかも存在しているような感覚の程度である。(西田公昭一九八八 所信の形成と変化の機制についての研究(1) 実験社会心理学研究二八、六五―七一)

そして、オウムにおいては、信徒たちが客観的現実として認識していた宗教的経験を根拠とする行動規範が定められていました。ですから、信徒にとっては、その規範も現実的だったのです。

たとえば、殺人を救済、すなわち「善」とする規範は、前述(本文27〜29ページ)のように、輪廻転生、麻原の救済能力、および現代人の苦界への転生などに係わる宗教的経験に基づいていました。一般的な社会通念は「命は地球より重い」ということですが、それが「この世の一生限りの命」などの日常的経験に基づいているのと同様です。

ところがオウムでは、日常的経験のほうは、宗教的経験によって幻影とみなされ、無意味化されていました。そのために、宗教的経験に基づく行動規範が一般社会のものに取って代わっていたのです。

実際、信徒は教団独特の規範に従い、麻原の指示であれば殺人まで犯しました。信徒の見地からは、教義の世界が幻覚的経験によって現実として知覚され、加えて、周囲の人たちもその世界観に合致した思考や行動をしていたため、教団の規範も現実的に映っていたのです。つまり、教団内では教義そのものの世界が実現しており、信徒はその中に没入している状態でした。

なお、違法行為を肯定する教義については、信徒が疑問を抱かないように、麻原は細心の注意を払って説いていました。すなわち、この教義が説かれたのは主に出家者に対してであり、信徒において、出家するほど麻原と教義に対する帰依が形成され、かつ入信前に培った価値観が変容した後(本文25〜29ページ)なのです。入信直後に

このような教義を説かれたら、これを受容できる者は皆無でしょう。さらに、抵抗なく受容されるように、説法の内容は軽度のものから徐々にエスカレートしていきまし
た―同時に、一般の規範から逸脱していく行為も、軽度のものから徐々に指示されま
した。そして、このような長期間の教化の後に、実際の違法行為が指示されたのです。
以上のように、オウムにおいては、信徒の規範意識が教団で通用しているものに
容し、信徒は常識から逸脱した思考・行動をしました。集団のこのような作用につ
いて、次のことがいわれています。

そもそも人はいろんな信念を抱いている。その中には善悪の規範基準になる信
念も含まれる。これらの信念は、親、教師、友人、知人などと相互作用を行いな
がら獲得され、社会的な共通性ができあがっている。しかし形成された信念がど
うして「良い」とか「悪い」といえるかの判断基準は、所属する社会における暗
黙の価値観に左右されるものであり、個人が所属意識をもって参照する社会集団
によって左右される。(西田公昭静岡県立大学大学院准教授作成の広瀬健一に関す
る「意見書」)

カリスマグループでは、集団凝集力(会員を集団に従属させ続ける影響力)、共
有信念、変成意識、行為の基準、およびリーダーの魅力の影響は、公然の強制が
なくても、行動の服従を強い、感情を変化させる作用をする。

バイオンやエズリエルのような集団心理の理論家は、個々の構成員の意思にか
かわらず、避けられない問題が集団においては現れることを指摘してきた。不可
解な個人の行動を彼らは説明するが、それは依存傾向や闘争―逃避パターンによ
うな、集団につきもののテーマの現れかもしれない。この点については、集団が
構成員をあたかも一つの集合体に変えるようなものである。(前出Galanter)

そのほか、カリスマグループの規範が、会員の本能的要求の表出や行動を統制する
ことが報告されています。(本文41〜42ページ)

以上のように、集団には個人の規範意識を規定する作用があるとされています。し
たがって、集団に係わる場合、それが会員の規範意識を一般社会のものと異なるよう
に変容させないか確認すべきだと思います。

まず、集団の会員が共有する「ビリーフ」(belief 思考・意思決定に使われる信
念)が適切に合理化されている必要があるでしょう。たとえば宗教では、教典自体に
は非現実的な表現が見られることがまれではありません。しかし通常は、そのような
表現は、信仰と日常生活の間に摩擦が生じないように、合理的に解釈されています。
集団の会員と会話をしたときに、なぜその人の「ビリーフ」が形成されたのか理解に
苦しむ場面があるならば、その集団は「ビリーフ」の合理化がされておらず、会員の
価値観や規範意識を不適切に変容させる可能性があります。

- ・ 項目の選択に偏りがあるかもしれませんが、次の点の確認も必要でしょう。
・ 指導者や教えへの服従がないか

その服従が、たとえば宗教上の指導におけることのように、範囲が限定されているように見えても要注意です。実質的には、それが生活全般に及んでいることがあります。いかなる状況においても、会員個人の判断が尊重されている必要があります。また、教えに疑念を抱くことや脱会が制限される場合は問題です。

・過度に厳しい規制がないか

思考や行動に関する道徳的規則が、社会通念と比較して過度に厳しい場合は、一般社会における生活がしにくくなります。その結果、社会からの離脱が促進されることもあり得ます（本文19ページ、25～27ページ）。また、規則違反に対して、過度の恐怖が喚起される場合は問題です。

・自己を否定されないか

自己を否定されると、指導者に服従する結果になります。オウムにおいては、信徒は煩惱を有している（本文18ページ）ために正しい判断ができず、それが可能なのは最終解脱者である麻原だけとされていきました。

そして、それは私にとって、体験的にも事実と思われました。私は自身が煩惱や悪業（カルマ）で汚れていること、また、麻原だけがそれを浄化できることを感じていたからです。

結局私は、それまでの人生が煩惱や悪業を増大させるだけのものだったことを認めざるを得ず、自身の経験や知識を信頼できなくなりました。これは、私が愚かにも麻原に従った原因の一つです。

・会員が一般社会から離れ、集団生活に入る傾向がないか

一般社会を非合理的に否定する教えを説き、会員をそれから離し、集団生活に誘導する（本文25～27ページ）集団は問題です。会員の価値観や規範意識は相当程度変容していると考えられます。集団生活に入った後は、さらに規範意識の変容が深まり、違法行為に及ぶ可能性もあります。

次の内容は、麻原が信徒に出家を訴えていた昭和六十三年十一月の彼の指示です。

「人材をぬきとる」など、人材を集める強い意思が感じられます。これは教団の大師（解脱・悟りを認められた高弟）のメモで、一般信徒には明らかにされていませんでした。

六十三年一月五日は黙示録の予言を麻原が七つの予言その後世界戦争。二〇〇〇年まであと一二年しかない。滅亡の日を出版しろと

一五日、オウムの方向性……旧約聖書によるとオウムの時間はあと七年、石油になつてハルマゲドン、ソ、米、日 世界大戦デザイン編集がプロ。パガンダマシンに完璧に成りきること（人材と経済力のためでもある）

一．新信徒の獲得、二．人材ハンター（ブレンハンター）（信徒の中から選ぶ）、三．大学理数化学の人材をぬきとる、四．ドクター（医者）を集める、五．美人を集める（看板）、六．経済的センスを持っている人間（プロパガンダⅡ広報）七．法律専門家 八．大師（一人で二～三億）が五〇〇〇人 九．建築班一〇〇〇人

一〇・七年後大師だけで一四五〇〇億

なお、右のように、麻原は理系の人材の獲得を重視していますが、それは当時既に、科学技術を用いた大量殺人である「ヴァジラヤーナの救済」を意図していたためと思われまます。実際、昭和六十三年十月二十八日、麻原は出家者に対して次の説法をしています―在家信徒がこの説法を聞くことは禁じられていました―、「ヴァジラヤーナの救済」を宣言した説法（本文30〜31ページ）においても、同様に「残すべきもの以外はポアする」旨説いていました。

近ごろ私は心が少しづつ変わってきている。動物化した、あるいは餓鬼化した、あるいは地獄化したこの人間社会というものの救済は不可能なのかもしれないなと。新しい種、つまり、今の人間よりも靈性のずっと高い種、これを残すことが私の役割なのかもしれないなど。

おわりに

これまで四つの観点からカルトについて述べさせていただきました。しかし、「入会防止」の目的なので、それに関連する内容に限定されており―学問的に説明が不十分でもあります―、オウムのすべてが網羅されているわけではありません。ましてや、私はカルトのすべてを論じることのできる立場ではありません。その意味では、本文は「オウムへの入会を防止するための手紙」でしかないかもしれません。

この理由で、カルトへの入会を防止するためにも、実学としてカルトのすべてを知るためにも、専門家による著書『マインド・コントロールとは何か』（西田公昭著 紀伊國屋書店）をお勧めします。

また、本文にはオウムの教義の概念が氾濫しているので、皆さまにどのようなように受け取られるか気掛かりでもあります。これまでも、私は多くの方々から事件に関する質問を受けてきました。説明責任があると思ひ、できる限り回答させていただきましたが、私どもの愚行をお伝えすることには失敗することが多かったです。殊に宗教的経験に係わる話になると、その方の人生経験に沿うように別の解釈をされてしまうことが多々ありました。人は自身の経験に基づいて物事を理解するものですから、無理もありません。

ですから、この度は説明方法を変え、具体的な描写とそれを説明する文献の引用を加えました。それでも、理解が困難な点があると思いますが、ご容赦願います。

現在、私はオウムの教義や麻原の神格を全否定しています。その正当性の根拠だった宗教的経験について、脳内神経伝達物質が活性過剰な状態で起こる幻覚的現象として理解しており、教義のいう意味はないと考えているからです。

それだけに、いかなる理由があれ人間として許されない罪を犯したことは、慚愧の念に堪えません。亡くなった皆さまのかけがえのない生命は取り戻すことができないこと、ご遺族の皆さま、重傷を負われた皆さまやそのご家族の皆さまの苦しみが今後も続くであろうことを考えると、後悔の念ばかりが浮かびます。

また、オウムの教義や麻原から心が離れた今、私は無信仰の状態にあります。しかし、宗教の価値は認めています。信仰によって人格を高められた方々が多数いらっしゃるからです。人間には超越的存在を感じる資質が備わっているのでしょうか。それは、人類が誕生して以来、いかなることがあっても―権力から弾圧されても、科学が発達しても―、宗教が存続していることが証明しています。その資質によって人格を高めることは、決して否定できません。そして、超越的存在自体も、私などが否定できることはありません。

「超越的存在も否定できない」と申し上げると、これまで私が述べてきたことと矛盾していると思われるかもしれません。実は、「宗教的経験は脳内伝達物質が活性過剰な状態で教義のいう意味はない」ということも、私の個人的経験によってそう感じて

いるだけであつて、客観的眞実ではないと自覚しています。私の経験に基づいて、多くの方々にそれを納得していただける程度の説明をすることは可能と思いますが、科学的に厳密な証明は不可能です。元々、この種の概念は、科学的な証明が可能のように定義づけることができないからです。それを認めながらも、私は自身の宗教的経験の意味を否定している状態です。その理由は、オウムにおける経験と決別するために、私がこの問題に関して結論を出さなければならぬ立場にあるからかもしれません。

話をカルトに移しますと、右の理由のために、カルトの超越的世界観についても、それを科学によつて排斥することは、極めて困難です。

また、前に「禅」の瞑想の例を挙げましたが、それは、オウムの技法と本質的な違いはありません——もちろん、教義は大違いですが——つまり、オウムは多くの文化遺産を採用——濫用というほうが正確かもしれません——してきたのです。この場合、伝統的に承認されており、有益性もある瞑想技法を「オウムのなもの」として排斥したら、社会問題になりかねないでしょう。そして、この事情はほかのカルトについても同様でしょう。このように、社会的要因によつても、カルトを構成する要素を排斥しきることは難しいのです。

さらに、次に引用しますように、オウムの教義に類似した考え方が社会に存在しないわけではありません。

ロポン・ペマラ師（ブータンの高僧）

病気には三つのタイプがあると云う。一つは、本当の病気で、これには医学的な治療がある。もう一つは、悪霊の祟りであり、これは占いと法要によつて対処できる。最後は、過去世の業の結果であり、自分がいま体調が優れないのは、このタイプである。だから、薬も、法要も役にたたず、唯一の対処策は善業を積むことである。だから、自分は念仏を唱えているのである。（今枝由郎『ブータン仏教から見た日本仏教』NHKブックス）（本文18ページ）

アルボムツレ・スマナサーラ長老（スリランカ仏教の高僧）

善悪行為のエネルギーは簡単には消えません。ポテンシャル（潜在力・業）として蓄積されます。しかし業（カルマ）はエネルギーですから、悪いエネルギーと強い善いエネルギーで抑えることは可能なのです。（A・スマナサーラ『死後はどうなるの？』国書刊行会）（本文18～20ページ）

江原啓之氏

例えば、自分は殺されたとします。自分が殺されることができるとするのは、人がいるからだ。

殺してくれる人がいるから自分が殺されることができると。だから、その人に対しては感謝しなきゃいけない。それで、自分を殺すということのために、その人はその分カルマを背負ってくれる。

自分は殺されたことにより、殺された心の痛みを理解できて、二度と人を殺さ

ない魂になれる。だから、その人のおかげで自分はそれだけ向上できるんだから、そして自分のことでカルマを背負ってくださるから、その人を愛さなきゃいけない。

ですから、世界人類みな愛さなきゃいけないにつながってくる。(本文27～28ページ) (佐藤愛子・江原啓之『あの世の話』文春文庫)

稲盛和夫氏 (京セラ創業者・氏の私塾である盛和会―塾生の多くは企業の経営者―における講話)

大病になるとか挫折するとか、そういう災難に遭うのは、自分が過去に―先祖をも含めて―魂が積んできたカルマ、業というものが消えるときなのです。私は皆さんに、災難に遭ったら喜びなさい、とよく言います。それは、自分が今まで犯した罪が消えるのだから、その程度のことと済んでよかったではないかと言いたいわけです。実際、今度の震災では不運にも亡くなられた方がたくさんいらっしゃいますが、皆さんはこうして元気に生きておられます。つまり、あなたの魂が今まで積み重ねてきた因果が災難に遭って消え、カルマが消えたのです。

大地にもカルマがあります。神戸周辺は昔の源平合戦やいろんなことがあって、そこには定着したカルマがあったのでしよう。私には、そういう積み重ねられたカルマを清算するために、今度のような大震災が起きたとしか思えません。しかし逆に考えれば、神戸周辺のカルマはいま消えたのです。ですから今後、神戸地区は大きく発展するはずです。(斉藤貴男『カルト資本主義』文藝春秋)(本文18ページ、29～30ページ)

諸富祥彦氏 (明治大学教授・日本トランスパーソナル学会会長)

私は、中学三年生の春から、おおよそ七年もの間、「人生の意味」を求め、いくら求めてもそれが求まらずに苦しんでいました。(略)

そんな思いで生きていたある日のこと、私はついに決意したのです。

もうこのままでは仕方がない。これから三日間、飲まず食わず寝ずで、本気で答えを求めよう。そしてそれでもダメだったら、今度こそきっぱりと死のう、と。

三日後……「答え」は見つかりませんでした。(略)

「もう、どうにでもなれ」。心身の疲労が限界にきていた私は、なかば魔が差したのも手伝って、実際に、その場に倒れこんだのです。うつぶせに。けれど、何か、いつもと違う……。からだがとても軽いのです。不思議だな、と思って、あおむけになってみると、横たわった私の、おなかのあたりの、ちょうど一メートルほどの位置でしようか、そのあたりに、何かとても強烈な「エネルギーのうず」のようなものが見えたのです。

「ああああ……。言葉に、なりませんでした。

けれども、なぜだか見たとたん、わかったのです。「これが私の本体である」と。ふだんこれが自分だと思っていた自分は、単なる仮の自分で、むしろその「エネルギーのうず」こそが、自分の本体だ。疑うことなく、そう思えたのです。

「何だ、そうだったのか」。その瞬間、すべてがわかりました。私は何であり、こ

れから私がどうしていけばいいのか、も。(略)

その「エネルギーのうず」は、ときには私と一体化し、ときには私の頭上に場所を移して、今も私を導いてくれています。(諸富祥彦『人生に意味はあるか』講談社現代新書)(本文13～14ページ)

このような考え方は、一般社会の一部にも存在する余地があり、直ちに実害をもたらすとまではいい切れない―カルトに見られるいくつかの条件がそろって現実的な問題が生じると思われます―としても、カルトの教えの特異性を遮蔽して、その受容を容易にする可能性は否定できないでしょう。他方、以上の引用は部分的なものであり、その思想全体としては有益である可能性も私は否定できないのです。

これらのエアポケットにおいて、カルトはいつまでも生息し続けるかもしれません。たとえば最近では、「スピリチュアル」が話題になっています。これはいまだ「カルト」とはいえないかもしれませんが、その超越的世界観が有益なものか有害なものか注意深く見守る必要があると思います。

もし、恐怖を喚起する概念が含まれているならば、影響を受けやすい人は日常生活に支障をきたすでしょう。また、「スピリチュアル」が集団化すれば、個人の価値観が相当変容して、社会通念から逸脱した行動をとる人も現れるかもしれません。

以上の状況においては、結局、各個人が「カルト」を理解し、その基準を定めるしかないでしょう。本文が少しでもそのお役に立てれば、幸いに思います。

平成二〇年六月二五日

広瀬健一

平成二〇年一〇月二七日改訂

平成二二年六月一八日再改訂